

[シンポジウム2]

『報徳全書』にみる齋藤玄昌について

—二宮尊行の二児に早期種痘—

中野 正人

壬生町立歴史民俗資料館学芸係長

二宮尊徳、通称金次郎。18世紀の後半、相模国栢山村に誕生した。その後、報徳仕法という独自の方法によって、封建社会が動揺した幕末期において農村復興事業に取り組んだ人物である。晩年、真岡の東郷から今市報徳役所に移った尊徳は、病床に臥し、病状も一進一退を繰り返した。高名な医師伊東玄朴や地元の医師が代わる代わる来診・投薬を続けたが、その中で奏功したのが壬生の医師齋藤玄昌の治療であった。

尊徳は玄昌を「医道巧者」(9-1260)と尊敬し、主治医として信頼していた。この一時が示すように、玄昌は名医として下野一帯に広く聞こえた人であった。

尊徳没後、二宮尊行(尊徳の嫡子、報徳仕法の後継者)は、「本邦牛痘之権輿」とも讃えられた壬生の医師齋藤玄昌に二児の種痘を懇請した。

種痘法が日本に入り成功したのは嘉永2年7月のことだが、幕許を得て大坂に除痘館、江戸に種痘所が設けられ普及が始まったのは、安政5年の4月、5月である。しかし、二宮尊行はそれより前に長男金之丞(尊親)に種痘をさせている。金之丞は安政2年の11月16日に今市の報徳役所で生まれたが、翌春の「報徳全書」に次のようにある。

2月28日 壬生宿医師齋藤玄昌、当方小児植痘瘡のため夜に入り罷り越し候こと。(5-1113)

3月6日 壬生齋藤玄昌の弟子、当方小児植痘瘡見舞いのため罷り越候こと。(5-1114)

齋藤玄昌は壬生藩の藩医で、嘉永3年2月に種痘を導入した蘭方医である。

ここで、特記すべきことは、金之丞が、生後100日で種痘接種を受けている事実である。また、「小児植痘瘡見舞」とあるのは、接種後8日の真偽痘の症状診断が重要であり、診断は弟子であり下野において玄昌とともに最も早く種痘を実現した一人である佐久間玄悦(後の齋藤元昌)が行った(5-1119)。

この結果が良かったからであろう、尊行は安政5年3月14日に生まれた次男の延之助(高英)にも種痘を希望し、翌年2月3日以降、玄昌に懇請した。当時この地方に痘瘡が流行していたこともあって、真剣である(9-1215)。玄昌は自邸のほか藩領である下総領の村々でも巡回種痘中でなかなか来られなかったが(9-1207)、3月1日夜、迎えに送った山中四方八(相馬藩士)と同道で来着、翌2日「小児種痘そのほか治療方相済み、昼後帰る」と記録されている(34-110)。その結果は良好で地元の医師もかなりの成果と見た。尊行は6月28日、そのことを記した礼状と薬礼500疋(約2両)を山中四方八に持たせ玄昌に届けた(9-1243, 34-138~9)。尊行は良き父親だったようである。

以上は、『報徳全書』に見る齋藤玄昌の藩を超えての活動であり、大坂の除痘館・江戸の種痘所が開設される以前に独自の判断で生後100日という異例の早い時期の乳児に種痘接種した事実は極めて興味深いことであり、玄昌の先進的な試みが明らかとなった。